仙厓和尚（せんがいおしょう）「老人六歌仙」

(記)　T.I

1. はじめに

人生は山坂多い旅の道

還暦　六十歳で　お迎えが来た時は、ただいま留守と云え
古希　七十歳で　お迎えが来た時は、まだまだ早いと云え
喜寿　七十七歳でお迎えが来た時は、せくな老楽これからよと云え
傘寿　八十歳で　お迎えが来た時は、なんのまだまだ役に立つと云え
米寿　八十八歳でお迎えが来た時は、もう少しお米を食べてからと云え
卒寿　九十歳で　お迎えが来た時は、そう急がずともよいと云え
白寿　九十九歳でお迎えが来た時は、頃を見てこちらからボチボチ行くと云え

これは、「長寿の心得」ですが、「仙厓（せんがい）和尚」をこの「長寿の心得」オリジナル創作者に結びつける下地があることを前原稿（2017/06/22 投稿「長寿の心得」）で述べました。今回は、その続編「老人六歌仙」です。

仙厓は、江戸時代後期の臨済宗妙心寺派の禅僧です。1750 年美濃国武儀郡高野村（武芸川町高野）字大野の貧農、井藤甚八の子として生まれました。１１歳のとき美濃の清泰寺の空印和尚について得度し、40 歳のとき博多の聖福寺（日本で最初の禅寺）の第 23 世の法灯を継ぎました。博多の仙崖と呼ばれ、権勢にこびず独自の境地で数多くの洒脱、飄逸な作品を描きました。俳画的な墨画に傑作を多く残しました。法名は義梵（ぎぼん）。天保８年(1837)、88 才で没。「人間五十年」と言われていた江戸時代における平均寿命と比較すれば、88 才はスーパー長寿でした。その彼の臨終時の言葉が、「死にとうない」「ほんまに、死にとうないのう」であったという逸話が残っています。この言葉をどうとらえるかは人それぞれです。私は、この言葉を苛烈なまでに修行した仙厓和尚の未練執着の妄言としてではなく、本心だととらえるのが好きです（from 前原稿）。

****

影山幸一氏による中山先生へのインタビュー記事（*1 ）の中に、以下の「中山先生の仙厓評」が紹介されています。

「禅僧にもかかわらず仙厓はまじめに禅の話はしない。仙厓自身が禅を否定し、禅から脱却することを目指していた。あらゆるものから自由となり、永遠の世界に身を置くことが禅の目的だが、禅を否定しないと最終的な悟りは得られるわけがないと仙厓は思ったのだ。これはすごいことで、どうやって悟ったのかはっきりとわかっていないが、たぶん諸国行脚の途中で命を落としかけ、九死に一生を得た経験があったのだろう。人が野垂れ死にする天明の大飢饉の時代に、一文なしの乞食坊主が地獄のような世界を見、禅の絵空事のような救済に対し、嘘をつけと思ったに違いない」

*1 ：影山幸一: 仙厓義梵《○△□》「わかる」がわかるか―「中山喜一朗」, アート・アーカイブ探求(DNP Museum Information Japan, 2016/9/15)
(http://artscape.jp/study/art-achive/10127048_1982.html)

****

2.　老人六歌仙

下記の２幅の「老人六歌仙（ろっかせん）」画賛（山水画・禅画などの画中の余白に書き添えた詩・文章）は、仙厓が書き残したもので、中の文章は同じです。「六歌仙」は、６人のすぐれた歌人という意味です。絵は、老人の集まりを在原業平など平安時代の六歌仙に見立てたものになっています。

仙厓の「老人六歌仙画賛」

画賛は、「五・七・五・七・七」の和歌形式になっていて６首あり、以下のようです（*2）。

志わかよるほ黒か出ける腰曲る
頭まかはけるひけ白くなる
手ハ振ふ足ハよろツく歯は抜る
耳はきこへす目ハうとくなる
身に添は頭巾襟巻杖目鏡
たんほおん志やく志ゆひん孫子手
聞たかる死とむなかる淋しかる
心ハ曲る欲深ふなる
くとくなる氣短かになる愚ちになる
出志やはりたかる世話やきたかる
又しても同し咄しに子を譽る
達者自まんに人ハいやかる

その現代語訳（*3,4）は、以下の通りです。

1．しわがよる、ほくろができる、腰まがる、頭ははげる、ひげ白くなる。
（顔に皺がより、肌にほくろができて、腰が曲がり、頭髪は薄くなり、髭が白くなる）
2．手は振れる、足はよろつく、歯は抜ける、耳は聞こえず、目はうとくなる。
（手が震え、脚がよろめき、歯は抜けて、耳が遠くなり、視力が低下する）
3．身に添うは、頭巾、襟巻、杖、眼鏡、たんぽ、温石（おんじゃく）、しびん、孫の手。
（身に付けるのは、頭巾や襟巻、杖、老眼鏡、湯たんぽ、かいろ、尿瓶、孫の手）
4．聞きたがる、死にとむながる、寂しがる、心はまがる、欲ふかくなる。
（人が話していると間に入って聞きたがり、死を恐れ、寂しがり、心がひねくれ、強欲になる）
5．くどくなる、気短になる、ぐちになる、出しゃばりたがる、世話やきたがる。
（くどくどと、気短になり、愚痴が多くなり、出しゃばりで、人の世話を焼きたがる）
6．またしても、同じはなしに子を誉める、達者自慢に人は嫌がる。
（いつも子供の自慢と自分の健康自慢の同じ話を繰り返すので、人に嫌がられる）

*2：https://blogs.yahoo.co.jp/bodai_ju/64279773.html?__ysp=6lCB5Lq65YWt5q2M5LuZ
*3：http://hisamitsu.exblog.jp/24267754/
*4：http://blog.livedoor.jp/mbcsouken/archives/1746007.html

老人の醜態や身勝手な態度を風刺して軽妙に表現した詩句です。老人となった自分の身を振り返れば、この内のいくつかに覚えがあります。この画賛の意味は、「老人は、自分は老人であると自覚せよ」との警告でしょうか。真意は老人賛歌だというのです（*2）。確かに、その証拠に、本図に描かれる老人たちは、満面の笑みを浮かべています。「人間にとって老いは必然。誰にでも同じように訪れるものならば、悲しまず、肯定的にとらえて人生を最後まで謳歌してみよう」という仙厓流の老いに対する考えの表明がこの絵であるというのです。私もこの考えに賛成です。その境地には未だ未だ至らそうにないのですが。